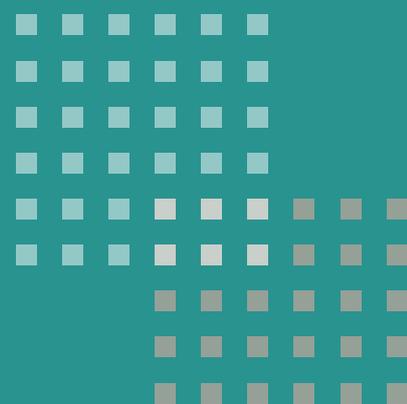




独立行政法人福祉医療機構助成金

# 若者居住支援団体の 包括連携支援体制の構築報告書



# 目次

---

調査の背景 . . . . . 1

取り組みの目的・内容 . . . . . 2

## 包括連携支援団体 座談会

参加者の紹介 . . . . . 3

自己紹介 . . . . . 4

支援団体同士の連携 . . . . . 5

支援者のケア . . . . . 7

## 若者の伴走支援を評価する際の視点と方法

武蔵野大学 人間科学部 社会福祉学科 助教 清水潤子 . . . . . 9

## おわりに

若者支援特有の難しさとその背景 . . . . . 13

連携することの意義 . . . . . 15

評価のあり方 . . . . . 16

## 調査の背景

### 取り組みの背景

サンカクシャでは、15歳から25歳くらいまでの若者に対して、居場所作りや仕事のサポート、住まいのサポートを行っている。

コロナ禍をきっかけに児童福祉法の原則対象外となる18歳を超えた若者からの居場所の利用希望や住まいの相談が増加の一途を辿っている。家庭が安心して過ごせる環境ではないことから家を出たいが資金面などで出ることが難しいという相談、ネットカフェや友人宅など不安定な居所での生活が経済的に継続できなくなった段階での相談もあれば、すでに公園など野宿の状態所持金が尽きた状態で連絡をいただくなど、若年層の住まいをめぐる相談は多様である。

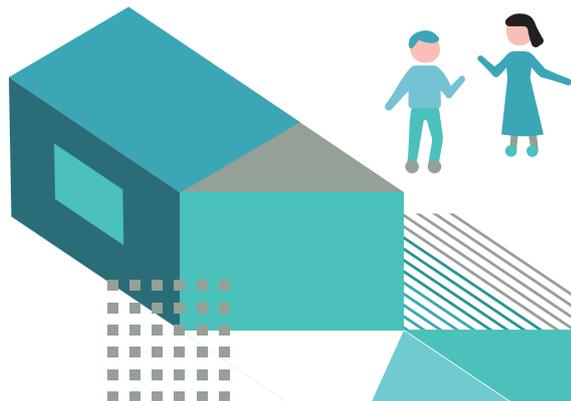
その背景の一つに、虐待環境にあるものの児童相談所の保護に至らない子どもが多くいることが挙げられる。ネグレクトや心理的虐待、性的虐待は本人からの申告がないと可視化されないことも多く、その分長期間にわたって被害を受けた影響による精神疾患や人間関係の不安定さなどが見受けられる。

過酷な環境を変えたいと思ったときに若者自身が考える選択肢は、①家庭で不適切な環境に耐えるか、②後のことは考えずにひとまず家出をするか、③住み込みや寮付きの仕事を探して家を出るかの3つだろう。③の住み込み等の仕事を見つけて家を出る場合、家を出ることが目的であることから、仕事をしても続かず、離職とともに不安定な居住環境に置かれることも少なくない。

こうして、行き場を失った若者たちが孤立した結果、孤独感の解消や仲間を求めて繁華街などに集うことや、目の先の生活費のために闇バイトなど犯罪の被害加害につながるリスクにつながっていると考えられる。

「トー横」「闇バイト」など若者を取り巻く課題がメディアに取り上げられる機会も増え、18歳以降の若者を取り巻く課題や、それに対する支援の必要性が少しずつ可視化されている。

しかし、若者支援に関しては、社会的養護出身者のアフターケアの文脈で少しずつ支援制度は増えてきているものの、ニーズに対して支援はまだ不足している。居場所や短期のシェルターなどはこども家庭庁の後押しもあり、少しずつ制度化が進んでいるものの、支援体制が十分に整っているとは言い難い状況である。



## 取り組みの目的

若者たちの特徴を二つ挙げるとするならば、第一に、行動範囲が広く、住民票所在地を起点とした自治体単位だけで支援することの難しさがあげられる。サンカクシャで住まいを利用した若者も地方出身者で「東京に来れば何とかなる」と、特にあてもなく東京に出てきたケースも少なくない。住まいを失った若者は、ネットカフェや友人宅等を駆使しつつ居所を転々とする傾向もある。

もう一つは、複数の支援団体を利用する若者も多い。団体ごとに特徴や得意とする領域が異なることも多いため、本人のニーズに応じて複数の団体を利用することは、つながる力や受援力の高さや捉えることができる一方で、支援団体によってアドバイスする内容が異なったり、支援方針が定まらないことによってかえって本人が混乱するパターンも見受けられる。

この数年で、私たちはアウトリーチ、居場所、住まい、仕事のサポートを伴走型で支援するモデルを作ってきたものの、上述したような若者の特性を踏まえた広域での支援体制の整備はまだ不十分である。

ニーズが顕在化し、相談の数も増え続ける中、各団体が「点」として受けるだけでなく、「面」として支援が展開できるよう、他団体との連携を強化し、相互に学び合える場作りや取りこぼしのないような支援体制の構築を目指す。

## 取り組みの内容

### ■若者居住支援団体の包括連携支援体制の構築

関東エリアにある若者を対象とした若年層を対象とした居住支援団体と包括的な連携支援体制を構築し、地域や団体の枠を超えた協力を強化する。

若者たちが直面する課題——お金のなさ、不安定な住居、孤立、使える資源の乏しい状況等——に対応するため、各支援団体が持つ特徴や専門性を活かしつつ、若者に対する伴走支援のノウハウや、本人から許可を得ている場合には情報共有をしながら支援の一貫性を確保する。

また、ネットワーク内での学び合いや、取りこぼしのない支援体制を目指し、広域的かつ継続的なサポートを提供できる仕組みを整備する。この連携によって、孤立しがちな若者に対して効果的な支援を展開し、生活状況の立て直しやその後の生活の安定を受益者だけでなく他団体のスタッフともサポートしあえる関係性構築を目指す。

具体的には下記連携団体と定期的にミーティングを行って若者の伴走するうえで課題になることや、どのような支援が必要かについての共有を行ったり、団体の現場のスタッフ同士の横の連携が図れるように交流会を行った。

### ■今回協力いただいた団体

一般社団法人アマヤドリ

一般社団法人コンパスナビ

一般社団法人 Masterpiece

社会福祉法人東京サレジオ学園

社会福祉法人子供の家 ゆずりは

# 包括連携支援団体 座談会

## 座談会主旨

サンカクシャへの住まいの相談は2024年1月時点で115件にのぼる。東京以外からの相談も多く、若者を対象にした居住支援を行う上で、他団体との連携はかかすことができない。

今回は、当助成事業でサンカクシャと連携しながら伴走支援を行っていただいた5団体にお集まりいただき、どのように連携を行っているか、伴走の意義と今後の課題について一緒に検討していただいた。



一般社団法人アマヤドリ  
石川 杏奈



一般社団法人 Masterpiece  
菊池 真梨香



一般社団法人コンパスナビ  
河本 稀英



社会福祉法人子供の家 ゆずりは  
矢嶋 桃子



社会福祉法人東京サレジオ学園  
安藤 みさと



武蔵野大学  
清水 潤子



**石川** アマヤドリで相談支援のリーダーを務めております、石川杏奈です。アマヤドリに入職して2年目になります。アマヤドリでは住居提供と相談を行っていて、住居提供に関してはシェルターとシェアハウス、アパートと、状況や緊急度に合わせて段階を踏んでいける仕組みになっています。今もいろいろなトラブル対応の真っ最中です（笑）。よろしくお願いします。

**菊池** 一般社団法人 Masterpiece のまりっぺこと菊池真梨香です。Masterpiece では住居、食糧配送、居場所の三本柱で活動しています。私は児童養護施設の前職員で、巣立っていく若者たちが大変だな、シェアハウスやたらいいんじゃないかなと住まいの提供を始めて今8年目の団体です。私が専従になってから3年目、他のスタッフも増え始めてから2年目。

私がひとりで活動していた時代から、スタッフが増えてきて、私の大切にしたいことも変わってきました。伴走者を一番大事にしたいという思いが強くなってきたんですね。それは結果的に若者たちに還元できるから。支援者ケアと基盤作りが一番の関心事項です。来年度から板橋区内でステップハウスをやりたいと思っています。



**河本** 一般社団法人コンパスナビの河本です。コンパスナビは運転免許取得の支援の活動から始まって、埼玉県から事業を受託してからは、居場所事業と住居支援と就労支援と自立支援とインケア<sup>\*1</sup>の五本柱でやっています。団体設立から10年目になりました。2024年10月にブローハンが代表に就任して、新体制で動いています。私自身は新卒で入って約5年目、今年は助成金が取れたので提供できる緊急避難住戸の部屋の数を増やそうとしています。

**矢嶋** 国分寺にあります、ゆずりはの矢嶋桃子と申します。社会福祉法人子供の家という清瀬にある児童養護施設を運営する法人の一事業所で、2011年に開所しました。個別相談が主で、あとは居場所や就労、高卒認定資格取得のための無料の学習会などいろんな用途で開けています。そのほかにはMY TREE ペアレンツ・プログラムといって、子どもとの関わりに悩んでいる、虐待してしまう親御さんの回復のためのプログラムも実施しています。

**安藤** 小平市にある児童養護施設の東京サレジオ学園の自立支援コーディネーター<sup>\*2</sup>の安藤みさとと申します。ゆずりはさんの事務所から近いので、ゆずりはさんが苦笑するほど卒園生がお世話になっていて。元々、男の子だけの施設でしたが、数年前に女の子の園舎を始めました。女の子のアフターケアをどうしていくかを考えているところです。

※1 インケア：社会的養護等に該当する施設に入所した子どもたちの日々の生活を支えること

※2 自立支援コーディネーター：児童養護施設における専門職の一つ。入所している子どもたちの自立支援計画の作成や大学等への進学希望者に対する奨学金情報の提供をはじめとする自立支援のサポート、退所者の状況を把握して必要なアフターケアが行えるよう調整する等、仕事内容は多岐にわたります。日々子どもに関わるケアワーカー職と共同して仕事を進めるソーシャルワーク業務が中心になっています。東京都でのみ配置されている職種（チャボナビより引用（2025年1月30日閲覧）：<https://chabonavi.jp/column/151>）

**清水** 武蔵野大学の教員です。研究関心は多様な人々による事業や活動の評価について。NPO や福祉の領域で大事な活動をやっているけれど、その意義や価値はどのように評価することができるのかを日々考えています。答えがあるわけではないけど、皆さんの取り組みから考えさせていただくお手伝いできればと思います。



—— 普段の活動の中で、他の団体さんとはどんな形で連携していますか？

**河本** コンパスナビは社会的養護のアフターケアがメインなので、普段は児相からの相談などが多いです。

**菊池** Masterpiece はここにいる団体とはお互い情報共有し合う関係がありますね。あと、2023 年度から板橋区の事業受託をするようになり、板橋区児相管轄の高校 3 年生と繋がらせていただいています。

**安藤** サレジオがゆずりはさんとつながり始めたのはずっと前から。「スープの冷めない距離」にゆずりはの事務所があるから、みんなに「ここだよー」って紹介していたらどんどん口コミで広がって。

**矢嶋** 高校生 3 人ぐらいがいきなりゆずりはのサロンに来たりして（笑）

**安藤** ありがとうございます（笑）。あとは認定 NPO 法人ブリッジフォースマイルさんには社会的養護の子どもを対象にしたセミナーをやっていただいています。

——距離や対象領域の近さは団体の連携が続く大きな要因ですよね。一方で、アマヤドリさんとサンカクシャは、若者たちが両方に相談していて連携が発生する印象です。

**石川** そうですね。アマヤドリは相談の9割は女性で、スタンプラリーのようにいろんな団体さんに相談しています。並行している相談先が本当に多い。もう把握しきれないですよ。団体を使い分けるとその子の全体像まで把握できないところが難しく。例えば、住居提供を通じて生活場面全体を見ていくと、今は休んだところで解決しない、それよりも仕事をして使えるお金を増やしたり、次のステップへの準備をしたりしないともっと困った状況になっちゃうよと感じることもあります。アマヤドリでは本人に無断で個人情報了他団体・機関に共有しないことを約束しているので、全部許可を取らないといけない。そうすると連携しきれない。団体さんによって支援方針も違うので難しいなと感じています。

**菊池** たしかに。そういう時、Masterpieceでは「うちの提供できることはこれですよ」と最初に伝えますね。他の団体にも行っていたら「こっちが知っておくべきことありますか？」と聞くこともあるけれど、あえて他の情報を入れないで、先入観なくまず聞くのは大事にしたいなと思いつつ。



**矢嶋** いろんな人に相談できるのは健全なことなんですけどね。ただ、一部分ずつを、それぞれいろんなところで相談されると、こちらも分からないことだらけで安心できない。だから私は、「一緒にやってほしい気持ちであれば、私たちもしっかりやりたい。でもちょっとずつしか教えてくれないのは私たちも安心できないんだ」って正直に言う。そこに至るまでは私たちはあえて根掘り葉掘り聞かないですね、言いたいことだけで大丈夫というスタンス。

——メインで伴走している団体と他の団体の意見が違くと、結局混乱しちゃうのは本人ですからね。連携する上で、団体の中の一人が開拓した他団体との関係はその人が異動すると途切れてしまうことも多いですよ。こういう機会を通して、現場スタッフ同士が繋がれたことは大きかったと感じています。

**河本** そうですね！ 代表をはじめ他のスタッフが連絡をとっていたリファーマ<sup>\*3</sup>が突然現場におりてくると、戸惑うこともあるので（笑）

**石川** 社員になってからは、代表が「アンちゃん行っておいで」みたいな感じで、現場の人に任せるというスタンスでいてくれるのでありがたいです。見守って助言をくれたりして。

**菊池** 私は最初からスタッフを巻き込むようにしてます。最初の面談から任せたりして。スタッフのおかげで徐々にわたしが居場所にいない状況が増えてきて、今は、まりっぺが出てくるときは逆にやばいとき、みたいな（笑）



**矢嶋** その点では、施設の職員さんの方が大変そう。「何をしたらいいかわからない。どこにどんなことを相談したらいいですか」みたいな電話がかかってくることもあるなあ。いきなりの異動で、1人部署で施設内に相談できる人がいない、横の繋がりがもないうって状態だとしんどいですよね。サレジオはどうですか？

**安藤** 私が自立支援コーディネーターに異動になったのは、導入された最初の年だったんです。サレジオには今コーディネーターが5人いて、長く勤めているスタッフが担当しています。子どもは園舎の職員とつながってる人もいれば、自立支援コーディネーターの中でつながれる人とつながっている人もいて、関係が悪くなっても誰かが受ける体制になってます。大変なときはチームを作って。半年おきに人間関係をリセットしてしまう子もいるので、自分以外の人とつながられているだけでもよかったと思えるというか、複数で対応できる体制は大事だなーと。

あとは、今回の連携で自分たちだけでは知識が及ばない制度の細かい運用などについて質問できたのも助かりました。まだ女子のアフターケアをしたことがないので、そのときはぜひ相談させてください。

**菊池** 食糧送りますよ！

※ 3 リファーマ：相談にきた方を他の専門家・団体に紹介すること。

**清水** 研究者の立場でお話を伺う中で、皆さんの横のつながりが意味するものの大事さを感じている。それは、情報共有の意味を皆さんが感じているということと、スタッフ同士がケアし合う場があることなのだろうと。それこそが支援者にとってどういう意義があったのかを考えることにつながってくると思いました。

**石川** たしかに、この集まりでみなさんと会えることがすごくありがたかった。基本うちはオンライン在宅が基本で、さらに横須賀は陸の孤島（笑）。だから、直接やり取りする機会が少ない。同じような支援をしている人の顔が見えるからこそ、共感したり、吐き出したりできたと感じています。

**河本** 定期的に相談する機会があったのはよかったなって思います。他の団体の運用方法を聞けたり、自分たちの現状を整理できて、改めて、「そっか、こういう方法もあるか」と新しい考えが生まれましたね。情報共有の場が月に一回あるのはすごく大きかった。

**菊池** 吐き出しの場として使っただけでねと言ってもらっていたのも大きかったかな。お互いのスキルアップの場でもあり、集まる機会があると顔が見えるから「またあそこに相談していい」と思える場でもあり。

**矢嶋** ゆずりはは、ほぼ雑談しかしてない（笑）

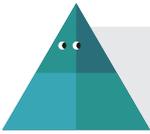
**清水** 連携していく上で、情報共有だけではなく、支援者自身のケアがあることがより持続可能な運営につながるんですね。事業報告書で、相談人数や面談した時間といった数値的なことやアウトプットも書かないといけない場面もあると思います。それも確かに大事ですが、それだけじゃないんだよね……という現場もたくさんありますよね。今日話を踏まえて重要だと感じたのは、皆さんの活動の価値を一緒になって引き出していく存在が必要なのかもしれないという気がしています。「自分たちとしては、これが意味があることだと思っている。なぜならば……」を説明できれば、共感してくれる人はいるんじゃないかなと。

——重複した課題を抱えている若者たちのサポートで大事なことは、この社会で生き抜いていく上で、「どうやって暮らしていきたいか」「どういう生活が自分にとって安心で安全で快適か」を本人自身が見つけていくことで、支援する側が一方的に定めたルールや規則で若者たちを縛るのではなく、若者たちが自ら気づき、考え、行動するという主体性の獲得の視点ですよ。先回りした「支援」は時に本人の力を奪ってしまわぬよう、あえて「待つ」といった姿勢が大事なときに、面談の時間や対応人数といった数値的なものだけでは測れない現場のリアルがあります。

そのときに、団体ごとの特徴を活かしつつ、連携が大事であると改めて感じました。

みなさんお時間いただいてありがとうございました！ 今後ともよろしく願いいたします。





# 若者の伴走支援を評価する際の視点と方法

武蔵野大学 人間科学部 社会福祉学科 助教

清水潤子

「若者の伴走支援において、どのような評価が有効なのか悩んでいる」…ひよんなことから助成事業を担うサンカクシャの担当者から SOS を受け取った。評価について研究している端くれとして、即座に「これ！」という答えを提示できれば良かったのかもしれないが、正直、それを躊躇った評価研究者としての自分がいたのも確かである。というのも、その SOS を受け取ったとき、「どのような評価が有効か」という問いかけが実践者側から投げかけられる背景には、一般的な評価アプローチと、実践者が評価したいことの間は何らかの違いがあり、なんだか評価に「もやもや」している支援者の様子が伺えたからである。

加えて、「若者」の「伴走支援」という、これまた、発展途上の「ふわふわ」した概念に基づく実践をどう評価していくのか、というのも直感的に悩ましかった。研究ならふわふわに形を持たせるように、操作的な概念を定義すれば良いが、実践世界に身を置いていると、それは研究者が思うほど、意味を持たないこともある。

ただ、いずれにしろ評価には必ず目的があるので、何が有効かという方法については、その目的と相まって議論されるべきであることは確かであり、私に関わることで、このもやもやを打破できるのか…甚だ不安はあったが、この「若者の伴走支援」の評価の在り方の探索に、私も研究者的な立場からお供させていただくこととなった。そして、事業を中心に進められたサンカクシャのメンバーと複数回のミーティングを重ね、部分的ではあるが支援者同士の情報交換会や座談会の様子を間近で観察させていただいた。そのようなプロセスを経て、今後若者の伴走支援に必要な評価に関する観点について、感じたこと・考えたことを以下の通り 5 点提示したいと思う。

## 1 支援の価値を先出しすること

「評価 (Evaluation)」という言葉の原義は対象の価値 (Value) を引き出す (Extract) ということから成り立つと言われている。このような意味に立ち戻ったときに、支援者側が提供する支援やプログラムにどのような価値を付与し、行動を起こしていくのかという視点を明確にする必要がある。

例えば、支援現場を想定すると、支援対象者の短期的なニーズを充足することが存在意義となる場合もあれば、社会において様々な抑圧や搾取を経験してきた若者当事者のエンパワメントや回復を目指していくことが重要であるというスタンスもある。また当事者が失敗を繰り返しながらも、学習や小さな成功体験を増やしていくという支援方法もある。極端な例を用いると、短期的なニーズを充足して終わりであれば、物理的に環境を整え、物品を与えれば良しとなる。一方で、エンパワメントや学習を繰り返していくアプローチでは、場合によっては支援者はただ待つ支援もあれば、引き算の支援をすることもある。それぞれは支援上は相互に排他的ではないかもしれないが、同じものさし (価値軸) で測ることは難しい。

前者は、与えれば与えるほど、介入としてカウントされ、アウトプットや実績として表出されやすい。一方で、与えることが先行する支援は、同時に当事者が学ぶ機会を奪うことにもなりかねない。この事業が単なる「支援」ではなく「伴走」支援であるのであれば、私たちは何にこだわるのか（何を重視し、どのような価値創出を希求するのか）をまず決めるべきであり、ここからすべての評価の旅が始まる。そして、それは支援者の実践の価値基盤となるものである。その価値に基づいて、自身・自団体における支援実践を振り返り、省察し、組織的な学習に組み込んでいくことで、初めて評価が評価として形骸化されず、活用されるものとしての意義を帯びる。支援文脈における「側面的」支援や「伴走」といった概念は、決して新しいものではないが、若者を対象とした伴走支援という点では、そのあり方や方法について探索的な時期にあると言えるため、実践からの学びを助成元をはじめ、幅広く公開することで、市民社会を啓発していくことにつながる。

助成事業というように、「説明責任」の目的で行われる評価も当然あるが、説明責任の価値軸は伴走者や支援対象者の価値軸になっていないことが往々にしてある。評価活動の目的は「説明責任」か「改善・学び」かの2択ではない。グローバルの助成財団においては、集合的な学習や学びの重要性が指摘されている中で、説明責任と改善・学びの両軸をにらみつつ、助成元が助成先とともに学ぶ姿勢も必要であるといえる。

## 2 価値については当事者の声を反映させること

あらゆる支援のスタートには、支援を必要としている人たちの声やニーズがある。「どのような価値を生み出す支援を行うのか」という声の前提には、「支援を必要としている人たちは何に苦しみ、どんなことを必要としているのか」といった明示的・暗示的なニーズを反映する必要がある。このプロセスには当事者の参加が不可欠であり、個別の聞き取りや、場合によってはフォーカスグループ等を実施しながら、一緒に考えられることが望ましい。不確実性の中を生きている彼ら（若者同士）だから語れることは、常に支援者側にはない視点を与えるものである。彼らの中に強さやこの先を切り開いていく要素を見出そうとする文化が、評価を実践する組織には必要であり、具体的な評価のアプローチではないが、評価活動を進めて行く上での血肉となる。

## 3 移ろいを肯定的に捉えること

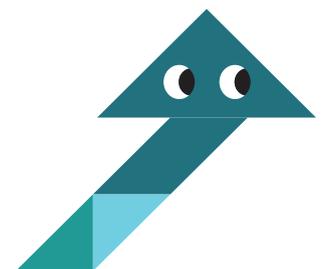
不確実な状況を生きている当事者の気持ちや行動が移ろうこと、ゆらぐことは本質的に免れない。対象者によってはそれが生存戦略である場合もあれば、自らの課題に真剣に取り組んでいるゆえの迷いや不安の証でもある。その移ろいを支援者が肯定的に捉えられない背景には、支援者都合の計画や、スタンス、外的要因が考えられる。一方、伴走支援は、寄り道することも、立ち止まって考えることも、スタートに戻ることもできる支援であるはずである。複雑な現象に対しては、発展的評価というようなアプローチがあり、支援や活動目標は仮置きで、どちらかといえは支援のプロセスを丁寧に記録し、出現した様々な事象が、本人・支援者にとって、どういう意味があり、どんな行動につながったのかを記録し、意思決定が必要とされたときのパターンを見出しながら学習することで、活動や支援の質を上げていくという方法がある。説明責任よりも、学習や改善に重きをおく評価アプローチではあるが、このようなアプローチを採用することで得られる学びもあると考える。

## 4 システムを変えていくための協調行動とその行動指針を評価軸として持つこと

若者支援の領域は、本報告書にもあるように児童福祉や障害者関連施策、生活困窮者支援や雇用施策といった制度の狭間にある課題である。福祉国家としての政府の役割は他の先進資本主義国家のように期待できない中、非営利セクターに課題解決の役割が期待されて久しいが、若者支援に流れ着く若者が、一時的に安定した居所につながっても、経済や雇用の構造や、つながりの不安定さまでを1-3年といった支援期間や一団体でできることには限りがある。また、若者支援の現場では、若者が複数の支援団体を利用したり、転々とするケースも多く見られるという特徴もある。そのような状況下においては、支援団体によってアドバイスする内容などが異なったり、支援方針が定まらないことで、本人も現場も混乱するようなケースも見受けられる。

そのため、本事業のような包括的な連携支援体制が整備される事業においては、システムを変えたり、面としての伴走を展開したりするために、それぞれが強みを活かしながら共通の目標（システムの変革から、ミクロの支援までを含む）に向かってともに立ち向かっていく視点と協調行動が必要である。その協調行動のためには、継続的かつ信頼できるコミュニケーションが欠かせない。

また、それぞれに強みをもつ団体はそれぞれにこだわりや信念もある。そのような団体が、イデオロギーの違いによって戦うのではなく、主義・主張が違っていても、政策の課題や当事者の課題に対して社会的に一定の責任を負っているという点では同じ立場にたっているため、共通の行動指針をもち、それを評価の軸として活用する方法もある（Principles-focused evaluation）。



## 5 機能不全に陥っているシステムに挑む支援者同士をケアする視点を持つこと

時に若者と対峙し、そしてその裏側にある社会システムの機能不全に立ち向かう支援者たちがいなくては、この若者の伴走支援は存在していない。24時間体制で支える現場においては、支援を必要とする人のために動くことは自明でも、支援者が支援されることはまだまだ意識として薄い状況がある。

一方、本事業でサンカクシャのメンバーによる各団体との伴走者との定例のミーティングで、伴走支援者が悩んでいることを、同じく伴走支援者に打ち明けられたことや、安心・安全に団体同士で支援の悩みを共有できることの意義が多く参加者から寄せられていた。支援者同士がケアしケアされながら、ともに回復し、パワーを高めていくプロセスが、前項のシステムを変えていく視点とも相まって重要である。

少なくとも、本事業における支援者の集いの場に集まった支援者の声色や表情、姿勢や話題などから、支援者支援は本事業において価値のあるものであることを、外部者としても強く感じることができ、そこでのつながりが支援の質にも貢献していることが垣間見れたことは、この報告書に記しておきたいと思う。そしてこのような包括的な連携支援体制の共同体が、どう在ることで支援者がエンパワーされるかについて共同体において議論し、ともにその視点で持って自らの実践を振り返ることも、評価の観点として重要であろう。

上記に示したものはあくまでも若者の伴走支援の評価について考えたときの複数の視点であり、すべてを評価として入れ込むことを求めるものではない。ただ、実践者の皆さんが、どんな目的で、どんなことを大事にして評価を伴走支援をともに行う仲間と進めて行くのが良いかについて考える際の一参考として頂けたら幸いである。

---

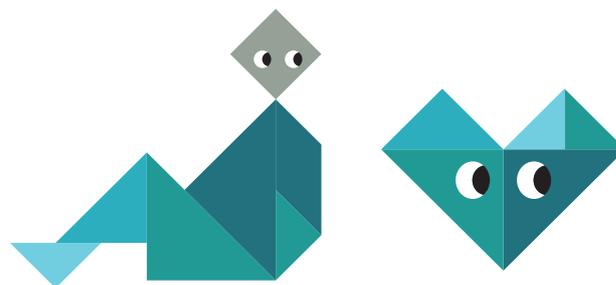
※評価に関連する日本語資料について、

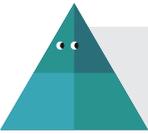
発展的評価については、<https://www.blue-marble.co.jp/docs/a11/b57/>

Principles-focused evaluation については、<https://www.blue-marble.co.jp/docs/a03/b07/>

を参照されたい。

---





# おわりに

## 若者支援特有の難しさとその背景

若者を対象とした支援の必要性が広く知られるようになってきている一方で、既存の制度では受益者のニーズに合わないことも多く、利用につながらないままになっており、民間の支援団体を中心にその間のつなぎを行っているのが現状だ。その背景にあるのは、若者を対象とした支援、なかでも居住提供を伴う生活全般の伴走の実践にはさまざまな支援の文脈が複層的に重なっていることが要因と考えられる。

住まいを失ってしまった方への支援という視点ではホームレス支援・生活困窮者支援の領域での知識や蓄積が活用される。さらに、長い間虐待を受け続けた若者のなかには精神科への受診を必要としていることも多く、ハウジングファーストの理念もベースにある。また、障害者支援、ユースワークの側面も持つため、必要とされる知識や援助技術の幅が広い。

一方で、公的な支援制度は領域ごとに縦割りで構成されているため、一つの窓口では相談を受け止めることができず、たらい回しにされてしまうこともある。そもそもどこに相談をすれば解決するのがわからないという若者も多い。

ハウジングファーストとは、1990年代アメリカのホームレス支援で始まった手法の一つ。ホームレス状態になってしまった方の中でも精神や知的の障害がある方に対して、施設等で居宅生活までの準備をしていくステップアップ方式で支援するのではなく、まずは無条件に家を提供すること、そこから多職種で連携しながらその方をサポートする体制を作る支援方法のこと。

図1 若者の居住支援に関わる伴走における特徴



図2 ソーシャルワーク的支援のプロセス



図2にあるように、一般的なソーシャルワーク的支援のプロセスは

①関係形成 → ②アセスメント (情報収集) → ③プランニング (計画・方針)

→④-1 課題解決的介入

- ・収入の確保 (制度利用、奨学金等)
- ・債務の整理
- ・住民票異動、国保加入等行政諸手続き
- ・連絡手段確保 (スマホ等)
- ・インフォーマル資源の活用としての社会サンカク

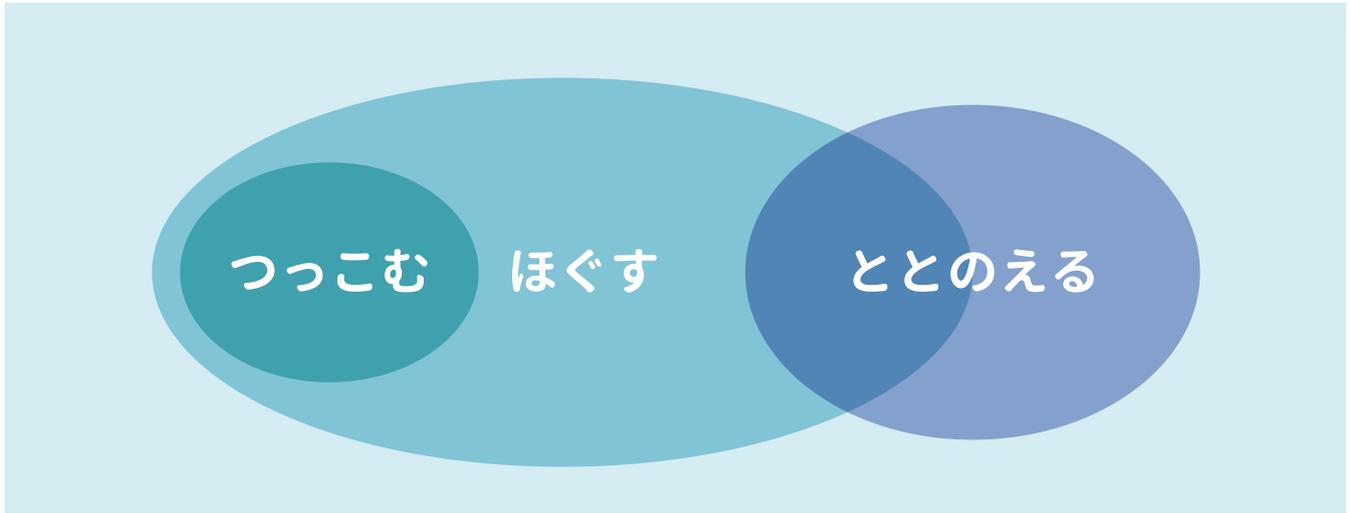
→④-2 ケアの介入

といった手順で進んでいくとされている。ホームレス支援で想定されている主な受益者は高齢の方が多く、10代、20代の若者を対象にしたときに、①関係構築と④-2 ケアの介入の部分で若者にマッチする工夫や仕組みが必要となる。サンカクシャで実践していることとしては、居場所でオンラインゲーム等ができる環境作りや、休息の手段としてのアクティビティの提供が挙げられる。こうした介入プロセスを簡易化したのが図3となる。

家が安心・安全を感じられる場所ではなかった若者にとって、家・住まい・暮らし・生活といった言葉から具体的にイメージできるものが乏しいことも若者の特徴だ。すでに家を持っていた方が失ってしまった場合は、それを現状に合う形で取り戻すといったプロセスを経ることもできるが、衣食住や掃除、洗濯だけでなく、休むことやゼロベースで本人と一緒に安心な生活を築いていくことも必要とされる。

関係形成がベースにあってこそそのアセスメントや介入であることを鑑みて、まずベースは若者がまとっている鎧を外していくこと、緊張をほぐしていき、本音や困りごとを言いやすい環境を作っていく (ほぐす)、ほぐすことの一端であり介入の一端でもあるのが、制度利用につなげたり、スマホの契約、身分証の取得などして生活のベースをつくる手続き支援 (ととのえる)、これらと一体化する中で、なかなか本人が向き合いきれない課題、例えば就労に意欲が向かない、依存症の問題、お金の使い方の問題などに直面化を共にしてどうすれば本人が少しでも生きやすくなるかを一緒に考えていく (つっこむ) のバランスをどう作っていくかに支援団体や支援者ごとの個性・特徴が現れながらの実践が行われている。

図3



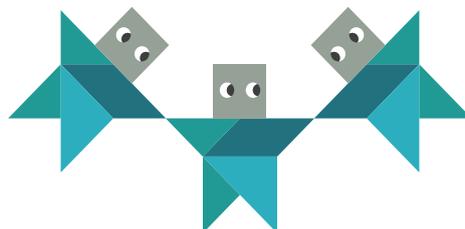
こうした若者支援の特徴を踏まえて、当助成を受けての成果は、大きく二つ挙げられる。一つは、他団体との連携の重要性を明らかにできたこと。もう一つは若者支援及び伴走支援における評価のあり方の検討が進んだことだ。

## ▶ 連携することの意義

他団体との連携は、若者一人ひとりへの伴走支援において非常に重要な役割を果たす。ソーシャルワークにおいて、個々の生活課題に対して包括的かつ多角的なアプローチを求められるが、その支援対象者のニーズは一つの専門分野だけでは対応しきれない場合も多い。そのため、複数の専門的な団体や機関と連携することが、支援の質を高め、より効果的な支援を提供するために不可欠となる。

さらに、連携によって支援対象者にとって一貫した支援が提供されることも大きな利点だろう。上述の通り、本人の許可を得た上で、各団体が情報を共有し、連携を深めることで、支援の切れ目がなく、問題が悪化する前に早期に介入することもできる。アフターケア団体や児童養護施設など近接領域の団体と連携することで、制度の最新動向のインプットにもつながる。

最後に、連携はスタッフの支援の質の向上にも寄与しうる。異なるバックグラウンドを持つ団体が協力することで、自団体の実践の振り返りにもつながり、より広い視野で問題を捉えることができ、解決策を見出す際のアイデアや視点が豊かになりえる。それに加えて、共通した課題が可視化され、求められる支援、資源が把握しやすくなり、新たな資源開発につながりうる。



## 評価のあり方

次に、若者支援における評価のあり方について考える。

助成金の獲得をしつつ事業継続していることも多く、事業の評価とは無縁ではられない。評価自体は、支援活動がどれほど効果的に実施されているかを把握し、支援の質を向上させるために非常に重要な要素だろう。評価は単なる成果の測定にとどまらず、支援対象者である若者自身の成長を促すためのフィードバック機能とも考えられる。

一方で、若者支援における評価を「結果の数値化」に頼りすぎることで、定量的目標を達成することが目的化する懸念もある。若者が自立したかどうか、就労の安定度などのアウトカムを基準に評価を行うことは、短期的な成果に焦点を当てることになり、支援の本質的な目的である本人の自己決定の背中を押すことや、生活を立て直し希望する生活をしていける環境を作るといった長期的な成果を見失う危険性もある。

単に「就労したかどうか」だけでなく、支援を通じて若者がどれほど希望する生活を送ることができるようになったか、休息等もふくめて生活スキルの蓄積や、精神面での安定や、人間関係を平穩に築けるようになったか、さらには支援の過程で直面した困難に立ち向かう力を養ったかといったプロセスに対する評価も重要だ。そのため評価の方法としては、定量的な指標だけでなく、定性的な評価も必要となる。定性的な評価において、若者が支援を通じてどのように変化したか、彼らの過ごす環境にどのような心理的・社会的変化があったのかという点で若者自身の声を反映させることが、支援がもたらした実際的な変化を理解する手段となりえるだろう。

また、評価は支援提供者にとっても重要なフィードバックの源ともなる。支援者が若者と共に「振り返り」を行い、どの部分がうまくいったのか、どの部分に改善が必要かを検討することで、より質の高い支援が可能になる。この振り返りのプロセスには、若者が自らの経験を共有する機会を持つことが含まれ、支援の現場での気づきや学びを次の支援に活かすこともできる。

評価というものが、若者にとっても支援者にとっても、強制的な「結果」の押しつけとしてではなく、自身が主体的に振り返り、成長を実感するための機会として提供されるものだといえる。定量・定性的評価をバランスよく取り入れ、支援者と若者が共に振り返る過程を大切にすることが、より効果的で持続可能な若者支援を実現していく上で必要なのではないかな。

### ■他団体との連携の意義（アンケート結果なども踏まえ）

- ・自団体の実践の振り返りと新たな視点が入ることによる実践の質の向上
- ・アフターケア団体や児童養護施設など近接領域の団体との連携により、制度の最新動向のインプットにもつながる
- ・共通した課題が可視化され、求められる支援、資源が把握しやすくなり、新たな資源開発につながりうる



インタビュー協力：

一般社団法人アマヤドリ 石川 杏奈

一般社団法人コンパスナビ 河本 稀英

一般社団法人 Masterpiece 菊池 真梨香

東京サレジオ学園 安藤 みさと

武蔵野大学 清水 潤子

社会福祉法人子供の家 ゆずりは 矢嶋 桃子

執筆：

サンカクシャ居住支援スタッフ

編集：

福井 晶

発行日：2025 年 3 月

発行者：特定非営利活動法人 サンカクシャ

〒 170-0012 東京都豊島区上池袋 4-35-12

電話 :03-6905-8287

